

# 常陸国(2)・下総国の歌

北川 和秀

## 《前回の宿題》

- 1 はぎ(萩) 一四一
- 2 うめ(梅) 二二六
- 3 たちばな・はなたちばな(橘・花橘) 一〇七
- 4 すげ・すが・やますげ(菅・山菅) 七四
- 4 まつ(松) 七四

- 6 あし(葦) 五五
- 7 ち・あさぢ(茅・浅茅) 五〇
- 8 やなぎ・あをやぎ(柳・青柳) 四九
- 9 ふぢ・ふぢなみ(藤・藤波) 四四
- 10 さくら(桜) 四一

## 《参考》

a 月経ち、日累りて、耀歌の会 俗、宇太我岐と云ひ、又、加我毗といふ。に、邂逅に相遇へり。(常陸国風土記 香島郡)

b 古老の曰へらく、昔、神祖の尊、諸神たちの処に巡り行でまして、駿河の国福慈の岳に到りて、卒に日暮に遇ひて、遇宿を請欲ひたまひき。この時、福慈の神答へて曰ししく、「新粟の初嘗して、家内諱忌せり。今日の間は、冀はくは許し堪へじ」とまをす。ここに、神祖の尊、恨み泣き警告曰りたまはく、「すなはち汝が親ぞ。何ぞ宿さまく欲りせぬ。汝が居むる山は、生涯の極み、冬も夏も雪ふり霜おきて、冷寒さ重襲り、人民登らず、飲食奠ることなけむ」とのりたまひき。更に、筑波の岳に登りまして、亦客止を請ひたまひき。この時、筑波の神答へて曰ししく、「今夜は新粟嘗すれども、敢へて尊旨に奉らずはあらじ」とまをしき。爰に、飲食を設けて、敬び拝み祇み承へまつりき。ここに、神祖の尊、歆然び諱曰ひたまはく、

愛しきかも我が胤 巍きかも神つ宮

天地の並齊 日月と共同に

人民集ひ賀ぎ 飲食富豊に

代々に絶ゆるなく 日に日に弥栄え

千秋万歳に 遊樂窮らじ

とのりたまひき。是を以て、福慈の岳は、常に雪りて登臨ること得ず。その筑波の岳は、往き集ひて歌ひ舞ひ飲み喫ふこと、今に至るまで絶えず。

(常陸国風土記・筑波郡)

c それ筑波岳は、高く雲に秀で、最頂は西の峯崢しく嶮く、雄の神と謂ひて登臨らしめず。…坂より東の諸国の男女、春の花の開くる時、秋の葉の黄つる節、相携ひ駢闐り、飲食を齋齋て、騎にも歩にも登臨り、遊樂しみ栖遅ぶ。其の唱にいはく、  
筑波嶺に 逢はむと いひし子は 誰が言聞けばか 嶺あすばけむ  
筑波嶺に 廬りて 妻なしに 我が寝む夜ろは 早やも 明けぬかも  
詠へる歌甚多くして載車るに勝へず。(常陸国風土記・筑波郡)

① 筑波嶺に雪かも降らる否をかも愛しき児ろが布乾さるかも(一四・三三五一)

② 吾が面の忘れも時は筑波嶺をふり放け見つつ妹はしぬはね(二〇・四三六七)  
右の一首は、茨城郡の占部小龍のなり。

【なさかの海】(茨城県行方郡潮来町)  
○常陸なる浪逆の海の玉藻こそ引けば絶えすれ何どか絶えせむ(一四・三三九七)

【久慈川】  
○久慈川は幸くあり待て潮船に真楫繁貫き吾は帰り来む(二〇・四三六八)  
右の一首は、久慈郡の丸子部佐壮のなり。

【鹿島】  
○霰降り鹿島の神を祈りつつ皇御軍にわれは来にしを(二〇・四三七〇)  
右の二首は、那賀郡の上丁大舍人部千文のなり。



◎ 下総 (今の千葉県北部)

【葛飾・真間】(市川市真間町)

勝鹿の真間娘子の墓を過ぐる時、山部宿祢赤人の作る歌一首 短歌を并せたり 東の俗語  
に云ふ、かつしかのままのてい

- ① 古に 在りけむ人の 倭文幡の 帯解きかへて 伏屋立て 妻問しけむ 葛飾の 真間の手児名が 奥つ城を こことは聞けど 真木の葉や 茂りたるらむ 松が根や 遠く久しき 言のみも 名のみもわれは 忘らゆましじ (三・四三一)

反歌

- ② われも見つ人にも告げむ葛飾の真間の手児名が奥津城処 (四三二)

- ③ 葛飾の真間の入江にうちなびく玉藻刈りけむ手児名し思ほゆ (四三三)

《参考》万葉集の「てい」

・「真間の手児名」このページの①②④⑥⑦

・「手児名」(真間の手児名を指す)このページの③⑤

・「石井の手児」(三三九八) 信濃国東歌

人皆の言は絶ゆとも埴科の石井の手児が言な絶えそね

・「さわたりの手児」(三五四〇) 未勘国東歌

左和多里の手児にい行き逢ひ赤駒が足搔を速み言問はず来ぬ

・「東路の手児の呼坂」(二四四二、三四七七) 未勘国東歌

東路の手児の呼坂越えがねて山にか寝むも宿は無しに

東路の手児の呼坂越えて去なば吾は恋ひむな後は逢ひぬとも

・「手児」(三四八五) 未勘国東歌

剣刀身に副ふ妹をとり見がね哭をそ泣きつる手児にあらなくに

勝鹿の真間娘子を詠む歌一首 短歌を并せたり

- ④ 鶏が鳴く 吾妻の国に 古に ありける事と 今までに 絶えず言ひける 勝鹿の真間の手児奈が 麻衣に 青衿着け 直さ麻を 裳には織り着て 髪だにも 搔きは梳らず 履をだに 穿かず行けども 錦綾の 中につつめる 斎児も 妹に如かめや 望月の 満れる面わに 花の如 笑みて立てれば 夏虫の 火に入るが如 水門入に 船漕ぐ如く 行きかぐれ 人の言ふ時 いくばくも 生けらしものを 何すとか 身を たな知りて 波の音の 騒く湊の 奥つ城に 妹が臥せる 遠き代に ありける事を 昨日しも 見けむが如も 思ほゆるかも (九・一八〇七)

反歌

- ⑤ 勝鹿の真間の井見れば立ち平し水汲ましけむ手児名し思ほゆ (一八〇八)

【東歌】

- ⑥ 葛飾の真間の手児奈をまことかもわれに寄すとふ真間の手児奈を（一四・三三八四）
- ⑦ 葛飾の真間の手児奈がありしかば真間の磯辺に波もとどろに（三三八五）
- ⑧ 鳩鳥の葛飾早稲を饗すともその愛しきを外に立てめやも（三三八六）
- ⑨ 足の音せず行かむ駒もが葛飾の真間の継橋やまず通はむ（三三八七）

【防人歌】

- ⑩ 行こ先に波なとゑらひ後方には子をと妻をと置きてとも来ぬ（二〇・四三八五）
- 右の一首は、葛飾郡の私部石島のなり。
- ⑪ 旅と云ど真旅になりぬ家の母が着せし衣に垢つきにかり（四三八八）
- 右の一首は、占部虫麻呂のなり。
- ⑫ 国国の社の神に幣帛奉り贖祈すなむ妹がかなしさ（四三九一）
- 右の一首は、結城郡の忍海部五百麻呂のなり。
- ⑬ 天地のいづれの神を祈らばか愛し母にまた言問はむ（四三九二）
- 右の一首は、埴生郡の大伴部麻与佐のなり。
- 二月十六日に、下総国の防人部領使少目従七位下 県 犬養宿祢浄人が進める歌の数は二十一首なり。但し拙劣なる歌のみは取り載せず。